石川・四柳白山下遺跡（よつやなぎはくさんした）

1　所在地　石川県羽咋市四柳

2　調査期間　第二次調査　一九九五年（平7）四月～一二月

3　発掘機関　㈳石川県埋蔵文化財保存協会

4　調査担当者　川畑　誠・澤辺利明

5　遺跡の種類　集落跡

6　遺跡の年代　縄文時代中期～古墳時代中期、奈良時代～平安時代前期、鎌倉時代～室町時代

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

四柳白山下遺跡は、国道一五九号線鹿島バイパス改築工事に伴うもので、二〇〇〇年までに七次にわたり調査が行なわれた。本報告はその第二次調査に関するものである。

本遺跡は能登半島基部の西側に位置する。北西部の眉丈山地と南東部の石動山系の碁石ヶ峰山地に挟まれた邑知潟低地帯の南東寄りに立地し、碁石ヶ峰山地を開析して邑知潟へ流れる、複数の小河川が形成した扇状地扇端部に展開している。西方には邑知潟が広がり、能登国府（現七尾市）へ向かう古代の北陸道支路も邑知潟の南東側を経由していたと推定され、本遺跡周辺は水陸交通の便に恵まれていたものと考えられる。

本遺跡では縄文時代中期から中近世にかけての複数の生活面が確認されている。

遺構としては井戸・竪穴状遺構・溝・掘立柱建物柱穴などを検出し、遺物として陶磁器・中世土師器・漆器・木製人形などが出土している。複数確認された自然石を組み上げた井戸は掘立柱建物に付属するものと考えられる。

今回紹介する木簡はD地区第Ⅰ面（一四世紀後半～一六世紀）の一号井戸から出土している。一号井戸は平面円形を呈した石組み井戸で、径約一六〇㎝深さ約八〇㎝を測る。井戸底に自然石を敷き、その下に墨書した板が埋められていた。埋土からは漆器椀が出土している。

8　木簡の釈文・内容

(1)　・　四柳　の方
　　。　文明十七年□
　　□□□□」

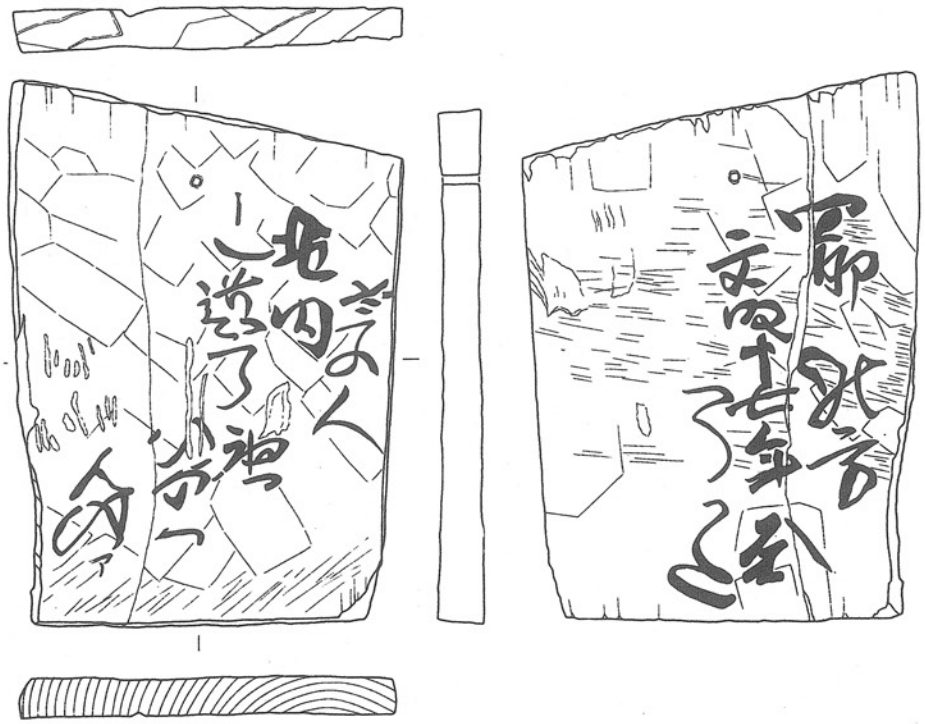
・□□人
垣内
・□□□坐□
□□□□
□□□□
□□□□」

287×(206)×24　065

年号の記されている面が表と思われる。右側が欠損している。上端は斜めになっていることから、本来の形状は駒形であったと想定され、右半分が欠損していることになる。また径約五㎜の穴が穿たれており、釘などで打ち付けられていたか、紐などで吊り下げられていたものと考えられる。井戸底に埋められる前は、近辺に掲示されたのであろう。表面に目立った風化の痕跡が認められないことから、掲示は比較的短期間であったと推測される。木簡に記されている文字は、かなり癖のあるくずし方である。裏面の終わり三行には名前が記されているものと考えられる。

また、「文明十七年」は一四八五年で、遺構の年代観と合致する。

9　関係文献

㈳石川県埋蔵文化財保存協会『㈳石川県埋蔵文化財保存協会年報』七（一九九六年）

（加藤克郎（石川県教育委員会））